

Essay

Sapiarc.com

2008年9月27日 (2008-11)

『化学』という呼称はだれがいつから使い始めたか？

『蘭学者川本幸民』（著者は北 康利）という本が、去る7月2日にPHP研究所から単行本として出版されました。私は、新聞広告でこの本が出版されたことを知り、直ぐに東大本郷の生協書籍部に注文して購入しました。〔大学関係者をご存知のことですが、大学生協に加入していると、大学生協書籍部で購入する書籍は定価の10%引きになります。また、ネットで注文しておく、入荷したときに電子メールで知らせてくれるので、生協を通して書籍を購入するのが便利になりました。ただし、入荷したという連絡が来るまでに3、4日かかるので、もっと早く入手したい場合は他の方法によるしかありません。〕

私がこの本の実物を書店で手に取って見ることもせずに注文したのは、川本幸民(カワモト コウミン, 1810-1871)という人物に以前から興味を持っていたからです。私が川本幸民の存在を初めて知ったのは1970年代末のことで、東京大学百年史のなかの理学部化学科の歴史を執筆したときですから、約30年前のことになります。

本書の著者である北氏は、川本幸民が蘭方医、蘭学者として優れていただけでなく、科学とくに本格的な化学の紹介に力があつたこと、また化学に関係した幾つかの事業に関係したことを相当詳しく書いています。このような幸民の先駆的な事跡は、今では全く忘れ去られていますので、それを掘り

起こした著者の努力に敬意を表したいと思います。

東京大学百年史を書いたときに、気になったことは、化学という呼称が何時から使われ始めたかということでした。なぜかという、江戸時代後期には、舎密または舎密学が化学を意味する言葉だったからです。舎密はオランダ語の chemie を音訳したもので、セイミまたはセーミと読まれたことが多かったはずですが、シャミツも使われたと思われれます。普通に使われていた言葉であったことは、明治になってからも、大阪に舎密局という化学の教育研究機関が短期間設けられたことがあったことから明らかです。

舎密がわが国で作られた言葉であったのに対して、化学は中国で作られた言葉であることは間違いありません。このことは、北氏も本書で認めているのですが、北氏が主張していることは、化学という呼称をわが国で最初に使ったのは川本幸民であったということです。それは、川本が1860年(桜田門外の変が起きた安政7年=万延元年)に『万有化学』という題名の本を出版しようとして、当時川本が教授職を勤めていた幕府の蕃書調所(バンショ・シラベドコロ)に届け出たことに基づいています。のちに、この本は『化学新書』という題で出版され、蕃書調所とその後身の開成所で化学の教科書として使われたようです。

本書に書かれている上記の事実関係は、約 30 年前に私が調べて知ったことと一致しています。しかし、私は『万有化学』または『化学新書』を手にとって見たわけではなく(おそらく北氏も見えていないはず)、川本幸民がわが国で最初に化学という呼称を使ったといえるのかどうか疑問を感じました。川本が、この本の中で、なぜ舎密学ではなく化学という新しい言葉を使うのかを説明していれば、確かに川本が化学という呼称を最初に使った人と言えるでしょう。しかし、その点は明らかではありません。それで、東京大学百年史には、私は次のように書いておきました。

『蕃書調所は文久元年(1861)小川町に移り、翌文久二年洋書調所と改称され、小川町から護持院ヶ原(現在の神田一ツ橋、如水会館の辺り)に移転し、再び改称されて文久三年開成所となった。この頃同所教官の一人であった宇都宮鉦之進(のちに三郎)は、洋書調所が開成所と改められたことに伴い、精錬方を化学所と改称することを提案し、これが認められて慶応元年(1865)から開成所内の化学所となった。化学という呼称が公的機関に用いられたのは、このときが最初である。中国ではこれより以前から化学という言葉が使われていて、宇都宮は中国書の「化学入門」に「重学の力は物性を変せずと雖も化学の力能く物性を変ずるを以って化学と名(付)く」と書かれていることをあげ、「化学とは変な学ではないか」とする開成所頭取林大学頭を説得したといわれる。』

宇都宮鉦之進は川本幸民に教授手伝として協力した人でした。川本とは異なり、宇都宮は蘭学者ではなく、砲術の研究から技術全般に興味を持つようになった人だったようで、舎密というオランダ語系の旧式の言葉よりも化学という新しい言葉に魅力を感じたということはあると思います。いずれにせよ、1860 年ごろには、蕃書調所の精錬方では化学という言葉を使う方向になっていたものと思われ、それを書物の題

に使ったのは川本幸民が最初だったことはおそらく間違いないものと思われます。

上記のように、歴史上のあることを一点の疑いもなく認識するという事は難しいものです。僅か 150 年ほど前のことですらそうなのですから、もっと古いことを解き明かすことは至難の業というべきでしょう。

本書の良い点は、幕末に活躍した蘭学者や技術者とそれらの人々の相互関係について詳しく書いてあることです。私は、この本で、これまでぼんやりとしていた人間関係を初めてハッキリと知ることができました。欲を言えば、人名索引や事項索引を付けて欲しかったと思います。その代わりに、この本には、川本幸民の詳しい年譜が巻末に掲載されており、便利だと思います。

著者の北康利氏は、東大法学部を卒業後、銀行勤めのかたわら、人物評伝などを書いてきた人で、最近の著書「白州次郎 占領を背負った男」は第 14 回山本七平賞を受賞しています。[ちなみに、白州次郎は、日本が占領下にあった時期に、吉田茂首相の懐刀として英国仕込みの流暢な英語を駆使して、マッカーサーを長とする占領軍総司令部と渡り合った人で、夫人は文筆家として著名な白州正子でした。] こういう経歴の北氏が、医学と化学の分野で活躍した川本幸民について、実によく調べたことには頭が下がります。

実は、北氏が取り上げた川本幸民と白州次郎には共通点があります。それは、両者が兵庫県三田(サンダ)市に関係が深いということです。川本幸民は三田藩の藩医でしたが、藩主の九鬼隆国の計らいで、江戸に出ることができたのです。他方、白州次郎の祖父にあたる白州退蔵は三田藩の重役で、明治維新に際して、三田藩が薩長側に付くことに功績があったとされています。ただし、白州次郎自身は兵庫県芦屋市で生まれ育った人です。私はこれらの土地に近い西宮市で生まれ、14 歳まで過ごしました。こ

れが、川本幸民や白州次郎に興味を覚える一つの原因になっていると思います。また、三田藩主の九鬼家からは、哲学者で昭和の初期に京都帝大哲学科教授を勤め、『「いき」の構造』を書いたことで知られる九鬼周造が出ています。三田という比較的地味な土地から、多彩な人物が輩出したことは興味深いことだと思います。

化学の先達川本の出身地である三田市に、今世紀に入ってから関西学院大学が三田キャンパスを開き、ここに2001年に理学部が移転し、現在は理工学部が発展していることは川本との因縁を感じさせます。以上。